

授業時間を廃した英語科目における学習行動

鈴木, 右文
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/1786409>

出版情報：英語英文学論叢. 65, pp.47-58, 2015-03-20. 九州大学英語英文学研究会
バージョン：
権利関係：



授業時間を廃した英語科目における学習行動

鈴木 右文

1. はじめに

九州大学では、いわゆる教養教育に相当する全学教育が、平成26年から基幹教育と称する新カリキュラムに変更された。新規入学者から、おおむね入学後の1年間に集中した教養教育を受講している。言語文化科目の中の英語科目は、卒業所要単位数の増加をはじめとした多くの新機軸を含んでいるが（詳細は鈴木（2014）を参照）、中でもCALL科目については、授業時間帯の設定を廃し、受講者が時間的場所的制約から解放された形で学習を自律的に進めることとなった。本稿では、旧カリキュラムにおいて授業で教室に受講者が集まる形で英語CALL科目が実施された場合に比べて、新カリキュラムにおいて授業時間がない形で英語CALL科目が実施された場合に、それまで顕著に見られた駆け込み学習（学習締切日近くにならないと学習への取組みに腰が上がりません）に緩和傾向が見られたことを報告し、その理由について考察する。

2. 比較対象の科目

新カリキュラムにおいては、1学年前期に「学術英語1CALL-A」、1学年後期に「学術英語1CALL-B」というCALL科目がある。旧カリキュラムにおいては、1学年後期に「英語ⅡB」、2学年前期に「英語ⅢB」というCALL科目があった。平成26年度の入学者からは新カリキュラムが適用されたのではあるが、新カリキュラムで使用する教材¹とそれを搭載する学習管理システム²の開発が間に合わず、新カリキュラムの初年度である平成26年度だけは旧カリキュラムで使用した教材を利用し

1 新しい教材は6年ほど前から開発が始まっている。これに関しては別に論考を発表する予定。

2 新しい学習管理システムは、国立七大学外国語教育連絡協議会附属外国語CU委員会の枠組みで大阪大学サイバーメディアセンターのマルチメディア言語教育研究部門が中心になって開発しているWebOCMnextを予定している。

た（平成26年度後期からは一部で、平成27年度からは全面的に新しい教材を使用する予定）。

従って、旧カリキュラムのもとで実施された平成25年度後期の1学年後期「英語ⅡB」と、新カリキュラムのもとで実施された平成26年度前期の1学年前期「学術英語1 CALL-A」と、同じ平成26年度前期でも旧カリキュラムのもとで実施された2学年前期の「英語ⅢB」は、いずれも旧カリキュラムの教材を使用したことになる。また、旧カリキュラムにおいては授業で教室に受講者が集まる形で実施されたが、新カリキュラムにおいては授業時間がない形で実施された。従って旧カリキュラムの「英語ⅡB」「英語ⅢB」と新カリキュラムの「学術英語1 CALL-A」を比較した場合、同じ教材を使用して実施されたという幸運な偶然により、何か相違点があれば、教材が違うという要因を除いて原因を考えることができ、授業時間の設定の有無が原因のひとつだと考えやすくなることになる。旧カリキュラムで1年生全員に対し1学年後期に実施された「英語ⅡB」では、『ぎゅっとe』（北辰映電株式会社）のリーディング中級40問、リスニング中級800問、文法421問がウェブ教材として使用された。この科目では、1学年の6月に実施されたTOEFL-ITPで520以上、学外で受験したTOEICで645以上のスコアを取得すると、申請により単位が認定されることになっているため、一部に履修しない学生がいた。

また旧カリキュラムにおいて2学年の多くの学部学科の学生³に対し2学年前期に実施された「英語ⅢB」では、『ぎゅっとe』のリーディング上級40問、リスニング上級720問、文法319問（「英語ⅡB」での421問の続編）が教材として使用された。この科目では、1学年の6月に実施されたTOEFL-ITPで570以上、学外で受験したTOEICで790以上のスコアを取得すると、申請により単位が認定されることになっているため、一部に履修しない学生がいた。

新カリキュラムでは、1年生全員に対し1学年前期に「学術英語1 CALL-A」が実施される。平成26年度前期の教材のレベルと問題数は旧カリキュラムの「英語ⅡB」の場合と同じであるが⁴、平成26年度前期

3 事情により、芸術工学部、医学部保健学科、工学部機械航空学科の学生はそもそも「英語ⅢB」の履修の機会がなかった。

の「学術英語 1 CALL-A」での教材と平成25年度後期の「英語Ⅱ B」での教材は、文法は同一の問題だが、リーディングとリスニングは同じ中級でも内容は異なっていた。「学術英語 1 CALL-A」では、1 学年の 4 月に実施される英語力診断テスト (TOEFL-ITP) で520以上のスコアを取得すると、教材の学習と定期試験の受験が免除になるため、一部に学習を途中で止める学生がいる⁵。

本稿では、1 学年全員をまるごと比較するのではなく、新旧のカリキュラムについて、2 群の同じ学部・クラスの受講者を選んで比較することとした。選んだのは文学部の 3 クラスのうちの 2 クラス (L1-1, L1-2) と薬学部の 2 クラス (S1-12, S1-13) である (「英語Ⅲ B」は 2 学年の科目なので、それぞれ L2-1, L2-2 と S2-12, S2-13 になる)。文学部は本来 3 クラスあるのだが、新カリキュラムでは 2 クラスがひとつのブロックとなって教材側で統計がなされているため、これらの 2 クラスだけを選ぶことにした。また、文学部と薬学部を選んだのは、筆者が平成 26 年度前期の「英語Ⅲ B」でたまたま担当したことによる。新カリキュラム 1 学年前期の「学術英語 1 CALL-A」と比較する科目としては、旧カリキュラムの 1 学年後期「英語Ⅱ B」だと、前後期と学期が分かれてしまい、後期には大学祭や冬休みがある分学習ペースが前期の場合とは異なるのだが、教材は同じ中級である。一方同じ旧カリキュラムの 2 学年前期「英語Ⅲ B」では、学期は「学術英語 1 CALL-A」と同じ前期であり、しかも平成 26 年度前期で重なるので比較しやすいが、教材は中級上級で分かれてしまう。どちらを比較の対象としても一長一短があるため、いずれも検討に含めることにする。

3. 駆け込み学習

旧カリキュラムの 1 学年後期「英語Ⅱ B」と 2 学年前期「英語Ⅲ B」

-
- 4 新カリキュラムでは学期中に全問題の 4 分の 3、夏休みに 4 分の 1 が割り当てられており、厳密には学期中の学習問題数は減っている。夏休みに学習を完遂すると成績に 10 点加点される。
 - 5 2 学年の 4 月にも英語力診断テスト (TOEFL-ITP) の第 2 回目があり、第 1 回目に比べてスコアが 20 以上上昇した場合は科目の成績評点が 10 点加点され、学習と定期試験が免除となる学生は、30 以上下降した場合に評点が 60 点となることになっている。

では、中間試験が学期中に3回実施された。15回の授業のうち、おおむね5回目、10回目、15回目に、それぞれ定められた範囲についての試験がウェブ上で実施された（定期試験はリーディングについてのみペーパーベースで実施された）。試験範囲はそれぞれ直前の5回の授業期間分であり、それに加えて、試験日の前日24時までに試験範囲の8割程度の問題数に設定したノルマの消化を義務とし、ノルマ消化が期限までに果たせなかった場合には不合格となった。従って、受講者は最低限ノルマの消化を確保すべく学習行動をとったことになるのだが、学習期間の間の各週に均等に問題を解き進めていくのではなく、直前になって集中的に問題を解く傾向が多く受講者に見られた。これは過去どの年度の「英語ⅡB」「英語ⅢB」にも共通して見られた傾向である（鈴木（2008）参照）。

直前になるまで腰が上がらないのは人間の習性であると言ってしまえばそれまでだが、このような駆け込み学習は好ましからざることである。第1に、継続的な取り組みによる能力の向上の機会を逸することになる。外国語の学習は継続的な取り組みを要するものであり、例えば一日ですべてこなして他の日には何もしないというやり方が効果的だとは誰も考えないであろう。第2に、ムラのある駆け込み学習を行うと、週によって学習時間に大きなばらつきが生じることになり、他の科目の予復習に甚大な影響を与えるのは間違いない。第3に、駆け込み学習は問題への取組みが雑になることにつながる。実際、駆け込み学習をしていると、問題にまともに取り組まずに、機械的に解答の選択肢をクリックして先へ進むだけという極端な行動に出る者も少なからずいた。こうした受講者の学習履歴を調べると、次のような点が見られることが多い。

- 1) 常に選んだ解答の記号が同じである
- 2) 解答の選択肢を読むだけでも時間がかかるのに数秒で解答している
- 3) リーディングの素材となる長文の読解速度が毎分数千語である（つまり読み飛ばして先へ進んでいる）

また、こうした駆け込み学習が顕著な受講者は成績もふるわない傾向にある（詳しくは鈴木（2009）参照）。

新カリキュラムの1学年前期「学術英語1 CALL-A」では、中間試験が実施されない（定期試験は実施される）かわりに、15週の学習期間⁶が3つに区切られ、定められた範囲の問題をそれぞれの期間の最終日である締切日までに消化しなければ、ペナルティとして成績の評点が20点減点されることと定められているが（3回の締切すべてで問題があれば合計60点の減点になるため、2回遅延が発生すれば事実上不合格になる）、この科目でも駆け込み学習の傾向が見られた。

4. 駆け込み学習のデータ

では、旧カリキュラムの「英語ⅡB」「英語ⅢB」と新カリキュラムの「学術英語1 CALL-A」では、どちらの科目において駆け込み学習がより深刻なのであろうか。あるいは差は認められないのであろうか。まずは学習管理システムに記録された各週ごとの平均消化問題数のデータを掲げる。薄い背景色を施し太線の枠で囲んだ部分は、学期中に3つある学習期間の最終日である中間試験のそれぞれの前日までの1週間であり、新カリキュラムにおいては学習締切日の直前の1週間にあたる。第3回目の中間試験や学習締切日の後の週でも、未消化の問題を対象とした学習が若干続くのが普通だが、本稿では無視した。

表1：旧カリキュラム25年度後期・1学年後期「英語ⅡB」

25後 週目	文学部 (L1-1/2)			薬学部 (S1-12/13)		
	読解	聴解	文法	読解	聴解	文法
1	1.5	19.7	46.5	1.3	8.4	32.1
2	1.9	42.6	30.0	2.5	58.1	37.3
3	2.0	50.8	32.2	2.1	59.9	28.6
4	2.0	46.8	24.3	2.0	35.4	26.6
5	2.0	44.9	19.0	1.7	41.9	16.6
6	3.4	43.5	17.7	3.0	54.4	15.2
1-6計	12.8	248.3	169.7	12.6	258.1	156.4
7	0.9	25.4	16.2	1.0	12.7	20.7
8 学祭	0.5	7.4	6.5	0.9	0.7	2.7
9	2.1	52.1	27.7	1.5	33.6	24.3
10	2.1	49.4	25.8	2.1	42.5	19.5

6 実際には休日の関係で16週間あった。

11		7.3	117.7	33.2	6.5	118.6	39.9
7-11計		12.9	252.0	109.4	12.0	208.1	107.1
12		0.8	24.4	25.7	0.7	14.4	16.6
13	冬 休 み	0.2	3.6	3.8	0.1	0.8	4.3
14		0.6	14.7	13.9	0.3	1.8	8.5
15		4.6	114.6	61.8	3.2	71.1	40.3
16		7.7	129.9	39.1	0.6	8.6	6.8
17					5.5	99.9	28.4
12-17計		13.9	287.2	144.3	10.4	196.6	104.9

* 文学部と薬学部で学習期間が1週間ずれているのは、学期末試験の実施のタイミングのずれによる。

表2：旧カリキュラム26年度前期・2学年前期「英語ⅢB」

26前 週目	文学部 (L2-1/2)			薬学部 (S2-12/13)		
	読解	聴解	文法	読解	聴解	文法
1	0.8	13.1	26.1	0.7	8.5	26.0
2	2.1	34.7	26.3	2.6	30.2	26.9
3	1.0	10.7	8.1	0.7	7.5	5.5
4	3.1	38.0	25.8	3.2	45.4	25.1
5	4.4	109.6	18.2	5.0	121.2	23.2
1-5計	11.4	206.1	104.5	12.2	212.8	106.7
6	1.2	17.8	16.7	1.4	25.0	15.1
7	1.6	24.5	20.4	2.1	27.7	24.2
8	1.8	27.8	17.4	2.1	29.4	16.7
9	2.0	33.6	14.0	2.0	29.4	13.5
10	5.4	101.7	21.6	5.4	114.0	29.0
6-10計	12.0	205.4	90.1	13.0	225.5	98.5
11	1.0	16.0	19.6	1.7	20.0	20.6
12	1.7	23.2	16.5	2.4	31.0	17.6
13	1.9	28.8	15.0	2.2	37.9	17.5
14	2.2	40.2	11.8	2.1	48.0	18.2
15	4.2	96.8	22.2	3.7	88.8	23.9
11-15計	11.0	205.0	85.1	12.1	225.7	97.8

* 表1 とほぼ同じ受講者の顔ぶれとなる。

表3：新カリキュラム26年度前期・1学年前期「学術英語1 CALL-A」

26前 週目	文学部 (L1-1/2)			薬学部 (S1-12/13)		
	読解	聴解	文法	読解	聴解	文法
1	0.2	1.8	3.5	0.2	3.5	5.8
2	1.0	15.7	22.9	1.2	18.5	17.6
3	1.5	34.9	28.4	1.6	32.2	27.6

4	1.7	36.0	29.1	1.6	37.5	23.3
5	2.7	59.2	27.5	3.6	57.4	34.2
6	3.7	72.6	19.0	3.3	89.0	23.7
1-6計	10.8	220.2	130.4	11.5	238.1	132.2
7	0.9	23.8	18.9	1.1	26.6	27.9
8	1.2	25.8	17.7	1.4	25.6	14.8
9	1.1	29.0	14.4	1.5	24.3	18.5
10	2.2	42.2	13.6	2.2	37.3	14.4
11	4.7	84.5	17.1	4.3	98.4	17.8
7-11計	10.1	205.3	81.7	10.5	212.2	93.4
12	0.7	18.4	19.6	1.2	24.4	21.2
13	1.0	23.5	13.7	1.8	32.8	20.8
14	1.4	27.4	14.5	2.3	37.7	27.5
15	1.8	45.0	14.7	2.3	43.4	27.2
16	5.0	89.3	17.6	3.5	85.0	7.1
12-16計	9.9	203.6	80.1	11.1	223.3	103.8

*表1、表2の学生よりも1学年下の受講者である。

5. 駆け込み学習の分析

3つの表を見比べてみると、1学期を3つに分割した学習期間のうち、中間試験や学習締切日直前の1週間でその学習期間に割与えられた範囲の問題の中でどれだけの割合の問題数を消化したのかをまとめると表4のようになる。

表4：締切日直前の1週間の学習量／各学習期間の指定学習量

		文学部			各週均等 学習の場 合の%	薬学部		
		旧カリ25 後ⅡB	旧カリ26 前ⅢB	新カリ26 前CALL-A		旧カリ25 後ⅡB	旧カリ26 前ⅢB	新カリ26 前CALL-A
読解	1	27%	39%	34%	17-20%	24%	41%	29%
	2	57%	45%	47%	20%	54%	42%	41%
	3	60%	38%	51%	17-20%	53%	31%	32%
聴解	1	18%	53%	33%	17-20%	21%	57%	37%
	2	47%	50%	41%	20%	51%	51%	46%
	3	45%	47%	44%	17-20%	51%	39%	38%
文法	1	10%	18%	15%	17-20%	10%	22%	18%
	2	30%	24%	21%	20%	37%	29%	19%
	3	27%	26%	22%	17-20%	27%	24%	7%

表4から言えることはおおよ次のようにまとめられるように思われる。

- 1) 平成25年度後期1学年後期「英語ⅡB」では、文学部・薬学部ともに、リーディング、リスニング、文法の第1学習期間での駆け込み学習がほとんどない。これについては、ウェブによる学習が初めてなので、緊張感を持ってそれなりにきちんと学習に取り組んだ成果だと思われる。
- 2) 平成25年度後期1学年後期「英語ⅡB」において、第1学習期間で見られなかった駆け込み学習が、第2回第3回の学習期間では見られる。これは、慣れてくると後から追いこめば何とかなるという考えを持つに至る履修者が多いからではないかと推測される。それを大学祭の忙しさが助長したとも想像できる。
- 3) 平成25年度後期1学年後期「英語ⅡB」の第1学習期間では駆け込み学習がほとんど見られなかったが、同じ履修者が受講した平成26年度前期2学年前期「英語ⅢB」では、第1学習期間から駆け込み学習が観察された。これは、前学期の経験をもとに、駆け込み学習をすれば何とかなると考える学生が多かったからではないかと考えられる。
- 4) 全般に文法では明確な駆け込み学習の傾向が見られない。これは、比較的短時間で解答でき、しかも問題が平易だからではないかと考えられる。1問あたりの平均所要時間と正解率は概ね表5のようになっている⁷。リーディングは始めると10分以上かかるのに対し、

7 表5で使用している数値だが、平成26年度前期1学年前期「学術英語1CALL-A」については、L1-1とL1-2からなる授業実施単位の数値とS1-12とS1-13からなる授業実施単位の数値を平均したものである。しかし「英語ⅡB」「英語ⅢB」については、そうした授業実施単位がないために、それらのクラスを含んだ授業実施単位の数値を使用した。それは、『ぎゅっとe』の統計機能では、各授業実施単位の中の一部のクラスだけについての平均解答時間や平均正解率を求めるには、ひとりひとりのデータをとり出して計算しなければならないのに対して、各授業実施単位での数値ならば簡単に参照可能だからである。平成25年度後期1学年後期「英語ⅡB」については、文学部L1-1とL1-2を含んだ授業と、薬学部S1-12とS1-13を含んだ授業での数値を平均したものを表5に掲げた。平成26年度前期2学年前期「英語ⅢB」については、L2-1、L2-2、S2-12、S2-13を含んだ授業での数値を利用した。

文法は30秒程度である。また文法の正解率はリーディングとリスニングよりもおおむね良好である⁸。

表5 1問あたりの解答所要時間と平均正解率

	所要時間			正解率		
	読解	聴解	文法	読解	聴解	文法
旧25後英語ⅡB	795秒	29秒	29秒	66%	65%	73%
旧26前英語ⅢB	682秒	40秒	30秒	79%	59%	71%
新26前CALL-A	736秒	27秒	28秒	69%	79%	76%

5) 平成26年度前期1学年前期「学術英語1CALL-A」での駆け込み学習の数値を見ると、全般に、平成25年度後期1学年後期「英語ⅡB」に比べても、平成26年度前期2学年前期「英語ⅢB」に比べても、駆け込み学習の傾向は改善されているように思われる。次節ではこの点を検討したい。

6. 新カリキュラムにおける駆け込み学習の改善

新カリキュラムの「学術英語1CALL-A」は授業時間を廃し、在宅中や学内での空き時間等を利用しての自律学習により進める形をとっているが、旧カリキュラムで授業時間がペースメーカーとして設定されている「英語ⅡB」「英語ⅢB」よりもむしろ駆け込み学習の傾向が緩和されているように見える。

「学術英語1CALL-A」には授業時間がないため、ペースメーカーとなるものは、各学習締切日までに各学習範囲をこなさなければならないという切迫感だけなので、授業時間があって強制的に問題をこなす時間が割り当てられる「英語ⅡB」や「英語ⅢB」に比べて駆け込み学習の傾向は強まるものと予想された。また「学術英語1CALL-A」では締切日に間に合わない場合のペナルティが1回につき20点の減点であり、「英語ⅡB」「英語ⅢB」での不合格という致命的なペナルティに比べてダ

8 平成25年度後期1学年後期「英語ⅡB」と平成26年度前期1学年前期「学術英語1CALL-A」は基本的に同じ中級レベルの教材であるにもかかわらず、リスニングについて「学術英語1CALL-A」の方が平均正解率が高いのが気になるが、特に思い当たる理由はない。

メージが小さいため、さらに駆け込み学習の傾向が強まるものと予想された。だが実際にはそれに反した結果が出ている。

これはいったいなぜなのであろうか。いくつか理由が考えられる。まず1点目は、「学術英語1 CALL-A」と「英語ⅡB」「英語ⅢB」との最大の相違点は授業時間の有無なので、学習ペースは学習者次第であるという点が、履修者に対して自己統制の必要の自覚を促したのではないかということである。授業時間の設定があれば、少なくともその時間の間に学習したという達成感が生じ、それ以外の時間での補完に腰を上げにくくしているのに対し、授業時間がなければすべては自分次第なので、必要なだけ学習を進めなくてはならないという気持ちが強く働くのではないかと思われる。もともと旧カリキュラムの科目では、授業評価アンケートが実施されるたびに、ウェブでの学習の最大の利点は時間と場所の制約からの解放であるのに、決まった時間と場所に集まって学習するのは不合理であるという不満の声が強く聞こえていた。それが改善されたことで受講にあたっただけの不合理感が除去されたわけであるから、そのことが学習行動自体に好影響を与えたと考えるのも無理なことではない。もしこのとおりであるならば、ドリル問題を解くタイプのウェブ学習では、かえって授業時間があることがマイナスに働くということを意味することになる。

また第2点目として、科目の配置される学期も関係していると考えられる。「英語ⅡB」が1学年後期、「英語ⅢB」が2学年前期の科目であるのに対し、「学術英語1 CALL-A」は1学年前期に配置されているので、入学後の緊張感が持続している1学年前期の間が最も着実に毎週の問題消化につながっているのではないかということである。入学後時間がたつにつれてその緊張感は薄まっていくものと考え、表4で「英語ⅡB」と「英語ⅢB」の駆け込み学習の傾向を比較してみた場合に、「英語ⅢB」では駆け込みの度合いが3つの学習期間をとおして高値で安定しているように読み取れるのもうなずける。

第3点目は学習分量である。「学術英語1 CALL-A」では、休業期間中も含めた継続的な学習をはかり、一部の学習分を夏休みに先送りしているため、学期中に消化する問題数が「英語ⅡB」「英語ⅢB」の場合と比べて少なくなっていることも取組みやすさにつながっているのではないかと思われる。同じ中級の問題でも、「英語ⅡB」では学期中にリーディ

ング40問、リスニング800問(文法は421問)を消化することになるが、「学術英語 1 CALL-A」で学期中に消化することになる問題数は、リーディングで30問、リスニングで600問(文法は315問)と4分の3である⁹。ドリル的学習が苦痛な受講者層にとっては問題が多いと思うだけで抵抗を感じるものである。

第4点は、担当教員によるケアである。「学術英語 1 CALL-A」は筆者とは別のCALL専属教員が運営しており、時折その時点までの「学習量」「学習安定度」「学習量のクラス対抗」といった数値が発表されていて、競争を促す結果となり、これが少なからず学習動機にいい影響を与えていたのではないと思われる¹⁰。「学習量」では消化問題数の競争となり、「学習安定度」では週毎の「学習時間」「リーディング問題消化数」「リスニング問題消化数」「文法問題消化数」の標準偏差の平均によって表される変動の少ないムラの少ない学習が競争の眼目となる。

加えて第5点は、新カリキュラムの「学術英語 1 CALL-A」で『九大英単』という単語・表現集が定期試験の範囲に含まれるようになったことである。定期試験へ向けての対応項目が増えているため、ウェブでの学習だけが試験範囲というわけではなく、ウェブ上の教材へ集中しさえすればよいということではないので、早めの消化への動機を高めたのではないと思われる。しかしこの点がもし本当であるとすれば、第3点で問題数が少ない方が学習意欲が湧くという点とは矛盾するかもしれないが、同じ教材が延々と続く場合と別種の教材と組み合わせられる場合とでは、同じ学習量でも後者の方が取り組みやすいということかもしれない。

9 夏休み途中の締切日までに残りの問題を消化すれば10点の加点がある(逆に言うと夏休みの学習分を放棄しても減点があるわけではない)。「学術英語 1 CALL-A」は後期の「学術英語 1 CALL-B」とあわせて2学年4月に実施される第2回目の英語力診断テストのスコアが成績に反映されるため、学習は1学年のときに行われるが、成績算出は2学年前期に行われる。従って夏休みの実績を成績に反映させることは時間的に可能である。

10 「学習量」「学習安定度」は個人を表彰するものだが、クラスまでは公開するものの、氏名は掲載せず、イニシャル1文字だけとした。

7. まとめ

本稿では、九州大学での英語 CALL 科目について、授業時間帯の設定のある科目とそうでない科目との間に見られる受講者の駆け込み学習の傾向を中心に比較し、授業時間の設定のない新しい科目の方が駆け込み学習の度合いが低いことを報告し、その理由について考察した。ドリル学習を内容とする英語のウェブ学習科目では、授業時間を設定しなくても成立する可能性が高いことを示しているものと考えている。そしてさらにそうした科目を円滑に運営するには、なるべく早い学期に実施すること、競争を促進する工夫をすること、他の教材を混ぜて単調にならないようにすることなどが必要になるかもしれないことを示唆した。

参考文献

- 九州大学英語表現ハンドブック編集委員会（徳見道夫監修、田中俊也、江口巧、大津隆広、鈴木右文、Stephen Laker）編（2014）、『九大英単 大学生のための英語表現ハンドブック』研究社。
- 鈴木右文（2008）「大学英語 CALL 授業での自律学習における受講者の行動」『言語科学』（九州大学大学院言語文化研究院言語研究会）第43号、87-93頁。
- 鈴木右文（2009）「CALL でのコンスタントな英語自律学習と試験結果との関係」『言語科学』（九州大学大学院言語文化研究院言語研究会）第44号、83-92頁。
- 鈴木右文（2014）「大学英語教育の目指す方向 —九州大学の新英語カリキュラムの狙い—」『英語英文学論叢』（九州大学英語英米文学研究会）第64集、19-35頁。